

将来が期待される京都の能楽師・観世流シテ方の味方玄が「重衡」を11日午後2時から神奈川・横浜能楽堂で演じる。源平争乱の時代に寺を焼き払い、後に処刑された平家の武将の悔恨と死後の苦しみを描く能だ。重く悲痛な作品に、味方は「生死を今一度考える機会になれば」と強い決意で挑む。

(塩崎淳一郎)

旅僧が奈良の寺に参ろうとすると、その地の老人(前シテ・味方)が現れ、寺の数々を紹介する。老人は、それらの寺を焼いた平重衡の回向を頼み、自らは重衡の亡霊であると明かして去る。僧侶が申うと、重衡(後シテ・味方)が出現。父の平清盛の命で焼き打ちをして処刑された経緯を語り、死後も続く苦しみを訴える。

「重衡」の作者は不詳で、長らく上演が絶えていたが、1983年に観世流シテ方の浅見真州が復活、その後は上演が続いている。

観世流・味方玄

「重衡」演じる強い決意



能「重衡」

「浅見さんらがシテを演じた舞台の地謡を2回経験した。その頃から埋もれていたとは思えないほどの魅力があると感じていた」と味方。「東大寺や興福寺などの奈良の寺を紹介する『名所教え』と、それらの寺を焼いて自責の念に駆られる重衡

武将の悲哀 「生死考える機会に」

が重なり、平家物語の無常観が表れてくる。この自責の念と無常観の二つが、作品の大きなテーマだと思おう」と続ける。

主人公の苦しみが作品を包み込み、重い空気が漂う。重衡が旅僧に助けを求めると結末も暗い。味方は「単純なハッピーエンドとならずに作品のテーマを終始追求するところに演劇としての『重衡』の面白さがあり、修羅物(武者が執心ゆえに修羅

道に落ち、苦しみを訴える能)ならではの作品の力が感じられる」と語る。

エンターテインメントとしての楽しい能はあまたあるが、あえて「重衡」のような能を上演することに意義を見いだす。今回は、横浜能楽堂が「死者の行く先」という主題を掲げ、日本人の死生観を問い直す公演。味方は「死が軽く取り扱われる現代。重衡の死を巡る舞台によって人間の生死を立ち止まって考える機会

になれば」という思いを胸に、本番に臨む心積もりだ。

能楽界ではまだ若い49歳。こうした重い作品は大きな挑戦だ。「内弟子として師事した(人間国宝の)片山幽雪先生が亡くなって約1年たち、これからは自らの力で立っていかなければならぬ。自分を律して稽古を増やし、師のように日々の鍛錬を大事にしたい」と語った。

045・263・3055。



「舞の美しさなどはない曲ですが、丁寧に演じているうちに自然とクライマックスに導かれるような力を持った作品です」と語る味方玄—安齋晃撮影

伝統芸